

た。翌冬、文雄氏より寄託分および残りの史料群の譲渡許可を得たが、翌年一月に文雄氏は逝去。○五年三月には浅野よろしく関係寺院へ封書・ハガキを用いた史料所蔵調査を試み、三か寺を順次訪問し得たが、五五%が喪失・所蔵無しの返事、四割が無回答であった。この結果には、不特定多数へのアンケートめいた手法ゆえではないかとの悔恨の念が残る。未発掘の史料への扉は、個別に丁寧交渉して初めて開くとの教訓を改めて得た。その後○六年に浅野関係史料一五〇五点を搬出、○八年に仮目録を作成、文雄氏の関係者へお届けした。

この調査・整理の途上で、一九四五年に「本土決戦間近」と危惧した上坂による史料疎開の企図や、戦後研究を止めたはずの上坂、および日大社会学教室による整理の形跡などが見えてきた。いずれもごく短い手紙、微細なメモから判明するもので、まさに「紙くず」が「史料」となる瞬間を体験した。そして、先学の収集史料群を再発掘し、その背負ってきた来歴ごと引継いで生かす作業の重要性・有用性を感じた。ただそれが先学の労苦を掠め取る行為にならぬよう、先学自身を対象にした研究をも遂行して、最終的にその史料にふさわしい保存方法や、今研究する主体と自分へと連なる道程を示すことが、ひとまず後学の責務と思われる(広義の「研究史」)。そうした履歴は、研究の面白さ・危うさ、実証研究としての信頼性も示し得る。それを「あとがき」や科研報告書にだけでなく、論文本体に書き記す作法を模索することまで含めて、「史料調査論」なのかもしれない。

私が資料について感じる二、三のこと

——京大文化史学派研究から——

菊地 暁

「普通の人々」の「普通の暮らし」を研究する民俗学にとって、「特別な書き手」が「特別な出来事」を書き記した文字資料だけでは「不十分」だ。そこで、「普通の人々」の「普通の暮らし」そのものを資料(「民俗資料」とし、その採集と比較を通じて歴史化を試みることとなる。こうした文字資料批判とそれに基づく「資料」概念の拡張要請こそ、「民俗学」の最大の存在意義ではないかと思う。

とはいえ、任意の「民俗資料」それ自体はどこまでも「現在の」であり、いつから続くものか判断できない。そこで民俗学はしばしば文字資料を「援用」することになる。文字資料だけでは「不十分」なのであって、「不要」ではないということを確認しておこう。

筆者の場合、広義の「フィールドデータ」に関心を有している。対象となる事象と対象化するまなざしを同時に検証することのできる、極めて貴重な資料であるからだ(菊地暁『柳田国男と民俗学の近代』二〇〇一、瀝青会『今和次郎「日本の民家」再訪』二〇一二など参照)。

近年取り組んでいる「京大文化史学派」研究もその一環。京大帝国大学の国史学教授・西田直二郎とその門下生を中心とした「京大文化史学派」は、民俗学・人類学など隣接分野を積極的に取り込みながら、日本の民衆宗教史研究にユニークな成果を残した一派であり、彼らを追跡することで、日本の民衆宗教

史と近代日本の人文社会科学を同時に再考しようというわけだ。

この学派に関連する資料として京都大学人文科学研究所の所蔵資料を取り上げたい。同研究所(一九四九設立)は、東方文化学院京都研究所(一九二九設立)、独逸文化研究所(一九三三設立)、(旧)人文科学研究所(一九三九設立)という目的も設置者も異なる三つの機関が「世界文化の総合的研究」という理念の下に統合されたものである。これらがそれぞれ「東洋部」「西洋部」「日本部」に継承され、さらに二〇〇〇年、「西洋部」「日本部」が「人文部」に統合され、現在に至っている。

近年、所蔵されていた非現用文書の残存状況を確認すると、その顕著な不均衡が明らかとなった。東洋部、西洋部、日本部の関連文書残存量が単純な三分とはならず、およそ八対一対一という割合となったのだ。要因はいくつか考えられるが、後継団体の「歴史意識」が大きく作用していると推測される。すなわち、研究所の伝統をことさらに尊重する「冷たい社会」東洋部と、それをかたくなに捨て去ろうとする「熱い社会」人文部という対比が可能となる。そして皮肉なのは、「冷たい社会」東洋部のほうが、資料の蓄積に基づいた「発展史」を有するのに対し、「熱い社会」人文部のほうが、資料の欠如のため「発展史」を持ち得ないという逆説的状况に帰結していることだ。

このことは「資料」を考えるに際して、一つの糸口を与えるだろう。一般に過去の情報は、記号に書き記されるか、モノの形を保つか、カラダに刻み込まれるか、そのいずれかでしか伝わらないが、この三者は思いのほか補完的だ。というのも、記号情報は何らかの物理的媒体を要求し、かつそれは「保持者」

を要求するからだ。そしてその保持者の「歴史意識」が存在状況を規定するということは、逆にいえば、資料の存在状況それ自体が、対象となる「出来事の一部」だということにもなる。付け加えれば、そのような存在状況に介入しそれを「資料」化するのには、結局のところ、研究主体の問題意識と探索能力である。まとめると、ヒトとモノと記号の相互補完的状况に研究主体が介入する場所に「資料」は発生する。こうした認識の下に、近代宗教研究の新たな領野が切り開かれるはずだ。

正徳寺資料から見える戦前の仏教国際化

吉永 進一

近代仏教史研究に新しい波があるとすれば、ひとつは理論的な方向での変化である。他の宗教研究の諸領域での成果を踏まえて、従来、研究の規範となってきた吉田久一、柏原祐泉、池田英俊らの枠組みを、どう拡張し、どう継承していくかという問題がある。もう一方に、これと通底して、一次資料の見直しがある。これはさらに二つの方向があり、最近発表された精神主義の著者をめぐる研究が端的に示すように、近代仏教史の有名人物についても実はまだ研究は十分ではない。もう一方は、今まで埋もれてきた事件に光が当たり、文脈づけられ、歴史的な意味が与えられる場合である。たとえば、明治二二年のオルコットの来日が、アジア全体の仏教復興における神智学の意義、あるいは欧米における仏教受容での神智学の役割といったパースペクティブから、ようやく歴史的事件として記述されるようになったのは比較的最近のことであり、ないものとされて